



第3回 UTAU DAIKU in ウィーン

撮影:David Moser

2014年に始まった、日本とオーストリアの国際交流イベント。

今年も日本全国から集まった合唱団がウィーン少年合唱団と共に、楽友協会大ホールで第九を歌った。

3年前、「東日本大震災の被災地復興支援のため、南相馬をはじめとする日本の合唱団と、オーストリアの音楽家が心をひとつに第九を歌う」という企画が目にとまり、感銘を受けて記事を書いた。その企画がもう3年も続いている。「被災者を忘れず、支え続けることが大切」と関係者も語るように、今年も国籍を問わぬ人びとが楽友協会ホールに集まり、被災者を念う。今年も発案者のモラス雅輝氏が日本語、ドイツ語の両方で挨拶したことにより、客席がひとつの目的を持った団体として団結された。シユテファン・ヴラダー率いるウィーンカンマーオーケストラは、



3月7日 ウィーン、楽友協会
主催 一般社団法人世界音楽合唱チャリティー協会
*コンサート入場料の一部が、東日本大震災復興支援にあてられる。

冒頭から神経質なほど想いのこもった音を奏でた。その硬さがほぐれてきた頃、楽想が雄弁に語り始める。特にコンサートマスターをはじめとする弦楽器が耳に心地よく、その温かさはソリストたちも包みこまれる感じだと語る。

第3楽章の前にはウィーン少年合唱団とソリストも登場し、宴もたけなわの第4楽章、バリトンの甲斐栄次郎の柔らかく、そしてピョンと張った声がクライマックスの始まりを告げる。ジョン健ヌツォの叙情的なテノールパートを堪能し、ウィーンサイドの女声ソリストが加わったアンサンブルが膨らんで来た時、待ちに待っていた合唱が歓喜の声をあげる。その喜びが一体となってホールを包み込む様を見たら、ベートーヴェンもさぞ満足するであろう。このような人間愛が世界を包み込んでくれるものだろうかと切に願う。

そこに居たすべての人間が感動を共有した後、アンコールには恒例となった「花は咲く」をウィーン少年合唱団が歌い始め、全員が声を合わせる。そして日本で困っている「兄弟」のために、出口で寄付を入れた封筒を募金箱に入れ家路につく人びとの顔には、温かい微笑みや涙が浮かんでいた。

(中東生)